

ツイッターを活用し、リビアの現状を世界のメディアに訴えかけた青年



@AJEnglish:リビアで今起きていることを取材してください!
この国の現状を世界に伝えてほしいのです。#feb17 #Qaddafi

医学生アフメド・サナラが最初のツイートをリビアから書き込んだのは、2011年2月13日のことだ。ツイッターなど使ったこともなかったが、どうにか使い方を覚えた。@とIDを付けてれば、アルジャジーラの報道ルームに注意を喚起できる。#Qaddafiは、2月17日に開かれる反政府デモを示すハッシュタグだ。サナラは、両親が移住したイギリス北部で育ち、自衛落大生生活に終止符を打とうと、両親

偉そうに言ってるけどおまえ、本気でやる気があるのか

親の祖国に渡った。英国アクセントで話すサナラもまた、チュニジアとエジプトで起きた革命のニュースをアルジャジーラの放送画面にかじりついて見守ってきたひとりだ。エジプトの民衆がカイロのタハリール広場に詰めかけた2月の頭にTahrir.comにログインしてみると、「2月17日にみんなで街路に繰り出そう」と呼びかけるページが見つかった。彼には確信があった。ムバラクがエジプトの反政府デモを銃で制圧しなかったのは、外国の報道機関が勢揃いしていたからだ。しかしリビアに報道の自由はない。そこで英国にいる弟のアナに電話をかけ、現地でツイッターアカウントを取得してもらったことにした。そうすればリビアのIPを避けて、アカウントをもつことができる。

その翌日、大学で友人たちを17日のデモに誘ってみたが、「一口をつぐんだほうがいい」といった反応ばかりだった。ここはエジプトでもチュニジアでもないのだ。革命評議会の目がどこで光っているか分からない。彼らは隣人を監視し、疑わしい活動を報告することの見返りに学校や職場で優遇されるのだ。15日の夜、サナラがテレビを見ていたら、友人から電話がかかってきた。1996年に発生した囚人大虐殺事件で政府を訴えて拘留された人権派弁護士との釈放を求める民衆が、ベンガジでデモを始めたといいの。本当にやる気があるか、そう問われた気がした。彼は野球帽を目深にかぶり、顔にスカーフを巻いて街に出た。通りを進むデモ隊を、少し離れた無関係な装束を身につけて歩くあたりを見回すと、200人ほどが自分と同じことをしていた。デモの群衆が市中心の円形広場に到達し、FEDDOMを意味

するアラビア語を油性マジックで記したプラカードを街灯の支柱に縛りつけた。彼は幻滅した。手書きのプラカードだ？ 俺たちの反政府デモはこんなに安っぽいものなのか。群衆はしばらく「自由」を連呼し、通りを行き交う人々は遠くから見つめるばかりだった。

今、兄は現場にいて、電話で話すことができます！
そのころ、弟のアナスは、10分おきに兄に電話をかけてデモの状況を確認していた。日付が変わり16日になってすぐに、彼は兄のアカウントからツイートし始めた。「ベンガジで反政府デモが行われています！ 取材を求めます。#Qaddafi #Libya」やがて、幾筋もの緑のレーザーポインターがデモの群衆の顔を照らす。政府側の勢力が広場に迫ってくる。サナラがふと見上げると、道路標識の支柱に登ってカメラの顔が描かれた看板を壊し始めた青年がいた。群衆が興奮にわき、快哉を叫んだ。ひとりの青年の行動をきっかけに、デモが本物になったのだ。2000マイル離れた英国から、アナスは電話越しに群衆の叫びを聞き、続報をツイートした。それから、思いっきり限りの報道機関のウェブサイトにCNN、BBC、アルジャジーラにアクセスし、入力フォームに、兄の電話番号を打ち込んでいった。サナラは投石に忙しく、状況を知るよしもなかったが、携帯電話が鳴った



The Modern Revolution

日本人だけが知らない
2011年3月、リビア革命勃発

世界経済と歴史に多大な影響を与えている中東の革命。日本が見過ごした3月のもうひとつの大事件を、女性ジャーナリストが報道する。リビア人4人への取材を通して伝える、革命の内情とは――。

Photos: Benjamin Lowy Text: Sarah A. Topol

リビアの革命は、実現したのか。4人の視点で語る、現地からの声

- 1.
- 2.
- 3.
- 4.

- 証言1**
医学生アフメド・サナラの場合
ツイッターを活用し、リビアの現状を世界のメディアに訴えかけた青年
- 証言2**
24歳アブダラ・アル・フニの場合
無鉄砲にも武器も持たず、自分の無力さを痛感した反政府軍兵士志願者の若者
- 証言3**
捕虜モハメド・エル・アディン・ハネシュの場合
リビア人同士の殺し合いを拒否した、カダフィ政府軍の准将
- 証言4**
移民アフメド・フネシュの場合
自由なリビアを夢見ては、焦燥感に駆られるリビア系アメリカ人

Translation: Otogiro Machikane

2. War's must-have item

無鉄砲にも武器も持たず、自分の無力さを痛感した反政府軍兵士志願者の若者



武器も持たずに——
僕は何をするつもりだったんだろう？

最初の日に
僕は死ぬと思う

ラス・ラヌーフはベンガジから街道を南西に、クルマで3時間ほどの距離にある町だ。どこまでも砂漠が広がる道を、私はオレンジ色の愛車キアで走り続けた。長距離ドライブの道連れは、兵士志願の若者ふたりだ。

反政府軍がリビア東部を解放すると、カダフィは西から軍を進め、石油精製施設の大部分がある地域を奪還しようとした。反政府軍も防戦に努め、ひとまずカダフィ政府軍を撃退した。そして3月上旬の今、砂漠の街道にあるビン・ジャワドという町が攻防の要となっていた。外国軍が介入するのは10日ほど先のことで、この時点ではカダフィ政府軍が優勢だった。彼らは優れた武器を持ち、その使い方も心得っていたからだ。

同乗者の若者ふたりには武器がなかった。反政府軍の拠点ラス・ラヌーフに着いたら、余った銃を探して最前線に向かう——それが唯一の計画だった。「最初の日に僕は死ぬと思うんです。銃弾の雨のなかに飛び込んでいくつもりですから」と若者のひとり、アブダラ・アル・フニという24歳の青年がキアの後部席から語った。リビアで取材を始めてからの2週間で、この種の

勇みだつた発言を何度耳にしたことだろう。若さゆえか、それとも、42年間この国に居座つた独裁者をもうすぐ追い出せると興奮しているのか。

黒ずくめの革ジャンとジーンズ、首にはアラブ風スカーフ。80年代の映画に出てくるハイジャック犯のようないでたちのアル・フニは、黙っていれば悪役で通つただろう——言葉を区切ることにこぼれんばかりの笑顔を見せてきて、馬脚を現すことさえなかったら。

アル・フニはベンガジの中上流家庭の出身で、会計学の学位をもち、流暢な英語を話す。リビアは石油資源に恵まれているため、近隣のアフリカ諸国ほど暮らし向きが悪くはなかった。反政府勢力の主張はひとえにカダフィの独裁からの解放であつて、そうすればベンガジはリビアのドバイたりうるとのことだった。

武器を持たない兵士志願者

アル・フニが最前線に行くと言つと、両親は驚きもしなかった。4日前から兄がそこにいたからだ。今朝、出発前に兄に電話をかける時、「銃も持たずにどうするつもりか」と言われた。「買おうとはしたんです」とアル・フニはこもなげに言うが、どこか弁解するようなニュアンスが声

から伝わってくる。「ですが、高すぎました。反政府デモが始まったころには1000ドルもしなかったAKの値段が、2倍にも3倍にも跳ね上がったってしまつて」ラス・ラヌーフ郊外にある反政府軍の検問所で、武器を持たない民間人はこより先には通せないと言われた。円陣をなした兵士たちがいつせいに空に向けてAKを発砲し始め、アル・フニがクルマから飛び出して彼らに加わろうとした。彼は戻つてくると、「大切に取っておきますよ」と、まるできれいな貝殻のように、ポケットから空薬莖を取り出してみせた。

兵士志願者に武器を与えようとする者は私は見聞きしたことがない。我々はなすすべもなく道ばたに腰かけて、空薬莖を手のひらで転がしていた。すると、彼が驚きの声をあげた。近所に暮らすハッサンという18歳の青年がAKを手歩いていったのだ。ハッサンはグリーン系のジャケットにベレー帽をかぶり、ポケットには弾薬ケースで膨らんでいた。違いは明らかだ。アル・フニはあこがれの眼差しを青年に注いだ。ハッサンは1週間前にベンガジ郊外の訓練キャンプに行ったが、新兵に回す武器はないと言われた。そこで愛車を売ってAKを買ひ、ヒッチハイクしてここまで来たという。それからもう

4日になり、最後の2晩は運送用コンテナの中で眠らねばならなかった。そこでハッサンに声がかかり、最前線の町ビン・ジャワド行きのトラックに彼は乗り込んだ。

「下働きでいいから、連れていってくれないかと頼みました」。ハッサンを見送るなり、アル・フニはそう言った。「ですが、乗せる場所がないと言われました。くそ、銃がないばかりに」。

しばらくすると、トラックが走り去つた方角から砲声がとどろいた。最前線が近づいてきたのだ。砲弾が検問所のすぐ近くに着弾し始め、誰もが慌てふためいた。

我々はキアに駆け戻ると、すぐに空爆が始まった。町そのものか何かの施設か——とにかく、西の方角が燃えていた。

「爆弾1発で、5人や10人がばたばたと死ぬんです」。クルマに額を押しつけて、祈るように語るアル・フニに、統計的にはそこまでの数字にはならないと告げると、彼は声を荒げて言った。「あそこにはハッサンも、兄もいるんです」。

日が沈むころ、爆撃が終わつた。アル・フニはベンガジに戻る決心をした。「武器も持たずに、僕は何をやるつもりだったんだろう？」。キアの後部席に乗り込むなり、彼はそつづぶやいた。

Sarah A. Topol

サラ・A・トポル

ジャーナリスト

本記事の著者は、エジプト、カイロをベースに活動しているフリーランスの女性ジャーナリスト。イエメン、アラブ首長国連邦、イスラエルなどからレポートし、赤裸々なルポタージュを「ニューヨーク・マガジン」や「ニューズウィーク」誌などに寄稿している。「GQ」とはこれが初の仕事となる。



Photo: Sarah Topol

反政府軍兵士がカダフィ政府軍に発砲し、民間人はとっさに身を伏せた。アジュダビア郊外、3月25日。



反政府軍の兵士がチャドのネックレスを高々と掲げた。カダフィが備兵を使っていることの動かぬ証拠だ。ビン・ジャワド、3月29日。



負傷した反政府軍兵士が、戦友の呼びかけに答えようとしている。ラス・ラヌーフ、3月27日。



助けに行くぞ：NATO軍の空爆後に、政府軍の戦車を鹵獲した反政府軍兵士たち。3月20日。



アラへの祈り：最前線近くでも、兵士たちは時間をやりくりして、砂に顔をすりつけ、神に祈る。ビン・ジャワド付近、3月28日。



3. A lying Prisoner

リビア人同士の殺し合いを拒否した、カダフィ政府軍の准将

命令を拒んだ懲罰でベンガジ送りになったんだ。私は木の根元に武器を置き、自分から降伏した。信じたくなければ、勝手にすればいい。



国民評議会の広報部門がお膳立てした捕虜への面会は、3月半ばから彼らの常套手段となったメディア用見学ツアーだ。反政府軍が占領した石油精製施設や前線を行ったり来たりさせることで、ジャーナリストを忙殺しようという魂胆が透けて見える。目的の面会相手も伝えられず、通訳の同行すら認められず、40人乗りのバスに記者たちは押し込められた。その取材行には最初から「カダフィ」的な空気が漂い、あの独裁者の許可を受けて前回この国を取材した体験が強烈な既視感とともに甦ってきた。あのときも各国記者たちはバスに押し込められ、記者会見のとき以外には、10時間にわたるベンガジ訪問を通じてバスから降りることすら禁じられたのだ。反政府軍の発生から6週間目となった今、反政府軍とカダフィ政府軍が砂漠の街道上の都市をめぐって泥沼の戦いを続けるなか、フランスやアメリカが空爆を開始した。内戦は手詰まりの横相を呈していた。

軍隊の命令に
そむくことはできない

「我々は軍人だ。軍隊の命令は絶対だ。」准将は尋問者の目を見て言った。するとアブ・バクルは白目を得たつもりなのか、彼を罵倒して満足したのか、相手にタバコを差し出した。准将はそれを受け取り、ふたりは友達同士のように声をあげて笑い始めた。バスに戻る時間になると、アブ・バクルは私に手招きをして、ハネシュは嘘つきだと言った。ベンガジ郊外で政府軍が劣勢になったとき、彼を捕虜にしたのだという。「誰だって、命令で無理矢理やらされたと言う。戦いたくなかったというのには本当か降伏したためじゃない。」

思いもよらなかった。
リビア人同士が殺し合うなど、ごめんだ

カダフィ政権時代の監獄を再利用した捕虜収容所を見学したあと、記者たちはまたバスに押し込められ、次の目的地へと向かった。そこは憲兵隊の駐屯地で、我々は狭い中庭に案内された。2ダースほどの捕虜が整列していた。みな黒人で、説明係によれば傭兵とのことだ。その一団から離れて白い長いすに腰かけているモハメッド・エル・アディン・ハネシュ准将は、案内役が無為のうちに過ぎると、反政府軍が敷設したらしい地雷を除去せよとの命が下った。そこでもハネシュは何もせず過した。次いで、ベンガジ攻略の先軍に加われとの命令がきた。前線で爆発があれば現場に急行して地雷を除去する役回りだ。しかし、それに必要な装備すら支給されなかったという。

攻略軍の車列がベンガジ郊外に近づいたとき、脱走の好機が訪れる。ほかの軍用車両から離れてばつんと1台きりになったとき、放棄された農場の脇に停車した。AKとピストルを木の根元に隠し、しばらくすると、反政府軍の一隊がやってきたので、両手をあげて歩み寄った。彼は殴られ、この収容所に連行された。「ここに高級将校はいるか？ ハネシュ准将が来たぞと伝えてくれ」と彼は訴えたのだという。リビアは小さな国だ、元からの軍人であれば、カダフィ政権下で中立的な立場を守ってきた自分を知っている人がきつといるに違いない、と。

そのうちに、反政府軍の将校がつかつかと歩み寄ってきた。「木の根元にうずくまっていたおまえを我々が力づくで捕虜にしたのだ。おまえが地雷の扱いに熟達した工兵隊の技術者であることは分かっている」。アブ・バクルと名乗った将校は、ハネシュに罵声を浴びせかけた。彼は首を

デモ発生から1カ月ほどたったころ、ハネシュは上官からの電話で、軍務を命じられた。息子のひとりにタバコを買いに行かせた。5カートンを抱えて戻ってきた息子を見るなり、妻はすべてを悟ったようだった、と彼は思い出を懐かしむように笑う。それ以来、家族との連絡は途絶えているという。自分が投降したことで家族に害が及ぶことを恐れていると、打ち明けてくれた。ベンガジのデモがトリポリにも飛び火し、デモ隊を武力で鎮圧せよと命じられたとき、ハネシュはリビア人同士が殺し合うのを拒んだという。「殺されるか投獄されると覚悟しました。しかし、シルテへ行くと命じられたのです」。カダフィの生まれ故郷の町だ。前線の正規軍部隊にいたのは自分のような者ばかりだと彼は言う。命令に背く勇気もないが、それを実行するだけの精根も尽き果ててしまっている。シルテに着任してから4日間

の反政府軍たちと同じく皮膚の色は浅いリビア人だ。ハネシュ准将の顔にはひどい傷痕が刻まれ、迷彩服の下には包帯があちこちに巻かれていた。

56歳のハネシュ准将は、それまで地雷除去の仕事につき、トリポリで家族と暮らしていた。軍隊に入ったのは18歳のときで、お陰で大学に行くこともでき、生涯の雇用も約束された。

これは、3、4日
どころの話じゃない

4. A Bridge to the Future

自由なリビアを夢見ては、焦燥感に駆られるリビア系アメリカ人



僕が生まれてきた意味が、今回の出来事に集約されているのです。この機会を逃すことはできません。

歴史的瞬間と生まれてきた意味

アフメド・フネシュは、ピッツバーグのリビア人コミュニティに属する全家族の苗字をそらで言える。29歳の彼が少年だったころ、毎週土曜日にはほとんどの家族が集まって長い時間をともに過ごした。女たちが料理にいそしみ、反体制派の父親たちがカダフィ政権を声高に論ずる様子を、フネシュはラム肉のローストの風味とともに覚えている。

ンボリだったが、3年間祖国を外から眺めたことで、急進的な反体制派になった。彼らの動向はやがてカダフィ政権の知るところとなり、奨学金が打ち切られた。祖国で投獄され、アメリカに密航し、難民保護施設に受け入れられた者たちもいた。が、ハミドたちはアメリカでリビア人の子どもと結婚する道を選んだ。そして子供たちにアラビア語とコーランを教えた。81年、彼らはリビア救済国民戦線を設立し、アメリカの支援のもと、北アフリカと中東の全域に現地事務所や民兵訓練キャンプをもつまでに

父は息子にアラビア語とコーランとカダフィの恐ろしさを教えた

84年に初めてカダフィ暗殺を試みてから少なくとも3回暗殺を試みたがうまくいかず、アメリカの支援も打ち切られた。フネシュはそんな父親たちから、カダフィ政権の恐ろしさを聞かされて育った子どものひとりだ。2月中旬にリビアで反政府デモが始まると、彼は仕事場でアルジャジーラを確認し、ホワイトハウス前で毎週行われるデモに出かけるようになった。「生ま

れてきた意味が、今回の出来事に集約されている。この機会を逃すなんてどうしてできませんか？」

両親には反対された。父には、80年代に軍事訓練を受けながら、涙をのんでAKを放棄した挫折体験があった。しかし経営コンサルタントとして働くフネシュは、とうとう両親には黙って休暇をとり、カイロ行きの飛行機を予約した。2月21日に幼なじみから電話がかかってくる。本気でリビアに行く気があるか、と聞かれたのだ。カイロから実家に電話し、驚きに言葉もない両親から事後承諾を得た。

若者が夢見る未来のリビア

その数日後、筆者がウズー・ホテルに出かけていくと、フネシュと友人がぐったりとすにもたれていた。このホテルは、国民評議会の外国メディア担当者たちの拠点のようになっていた。彼らの顔に浮かぶ失意の色は隠しようもなかった。新たなリビアで海沿いで商売を始め、サーフボードのレンタルも手がけたいと考えている。その案を売り込もうと待っている相手が、いつまでたっても現れないというのだ。「結局、この国ではコネがすべてなんです」とフネシュはこぼした。

砂漠の街道で：反政府陣営の旗が風にひるがえる。アジュダビアへの路上、3月20日。



+ GUIDE BOOKS

中東に関しあまりにも無知な我々。背景を知り、中東がより分かる4冊



> 『イスラム報道』増補版
著：E・W・サイド
共訳：浅井信雄・佐藤成文・岡真理（みすず書房）
アメリカと西洋のメディアはイスラムのニュースを、いかに構成してきたか。“隠されてきた”真の中東の姿を知る手がかりとなる本。（¥2,940）



> 『イスラム文化 その根柢にあるもの』
著：井筒俊彦（岩波文庫）
『コーラン』の訳者でもある筆者が行った講義の記録を、ムスリムの思想や文化の形成について分かりやすくまとめた啓蒙書。（¥693）



> 『ヨーロッパとイスラーム ー 共生は可能かー』
著：内藤正典（岩波新書）
日本人が中東情勢やテロ問題に対し、内向的な解釈や議論に終始することに警笛を鳴らす。自覚と相互の理解なく、共生することはできない。（¥756）



> 『(中東)の考え方』
著：酒井啓子（講談社現代新書）
通り一遍で表面的な中東への概念と偏見をぬぐう一冊。中東各国がどう国際政治と向き合ってきたかを、近現代史の事例とともに紹介。（¥798）

国連が飛行禁止区域を設定した日の夜、フネシュは同じくリビア移民である友人とクルマを走らせてベンガジに入り、カダフィ軍が都市に攻め込んだときその夜を、知人宅の屋根に腹ばいで寝そべり、いつ敵が現れるかと街路を見守って夜を過ごした。

この内戦で今のところ最も劇的な48時間を彼らは身をもって体験したわけだが、彼は無力感を覚えるようになっていた。無計画な己の行動が空回りすることが身に沁みていた。

後日再会した彼は、見違えるほど意気揚々としていた。あの後、担当者とは会うことができ、国民評議会のウェブサイトをリニューアルする案の売り込みに成功したという。「これからです、見ていてください」。肩越しに振り返ってそう言った。

4月半ば、彼はアメリカに戻った。電話をかけると、やけに陽気な声が返ってきた。リビア系アメリカ人による協議会の準備をしているという。欧米諸国に訴えかけて、リビア国民評議会への支援を求めるといった。

5月に入ると、国民評議会のサイトがリニューアルされた形跡はない。